

「昭和55年の出来事」

竹田 ひとみ

私はこの年の秋に嫁ぐ事が決まっていた。就職してから実家に中々帰れずにいた。だから嫁ぐ日までは両親の元で暮らそうと帰郷を決めた。年老いた祖母も喜んでくれた。季節は梅雨真只中。帰郷間もなく、九州地方を豪雨が襲った。激しい雨は滝の如く降り続け裏山が崩れるのか前の川が氾濫するのかと不安が頭をよぎる。家の中においても大声で話さないと聞こえない。道路は寸断され電気も電話も止まり山里は孤立した。真っ暗な夕方、雨合羽に長靴をはいた父が私を呼び「父ちゃんは消防で見回りに行く。お前はもう家の子ではない。よそ様の預かりものだ。何かがあっては先方に申し訳がたたん。あんたを守りたいが守れん。だから自分で命は守れ」父の目は鋭く真剣だった。「裏山の水が濁ったら村の一番高い家に走れ！婆さんも母ちゃんも気にするな」そう言って父は暗闇に消えていった。私は心細さで震えながら父の言葉を心で繰り返した。裏山の水を何度も確かめたが判断がつかない。時刻は午後十時過ぎ、私は母と祖母に今から避難する事を話した。足の悪い祖母を背負って父の言う高い家を目指しに必死に歩いた。母はおにぎりを作るとかわめていたが無理やり連れて行く。深夜大雨の中を突然訪ねてきた私達に驚きながらも「ようきた」と家に入れてくれた。蠟燭の灯りに照らされ不気味な夜は更けて行った。白々と明けていく朝の有難さは今も忘れられない。山道から懸命に手をふる父を見つけて私は泣いた。